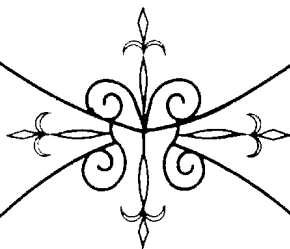




三島由紀夫全集



32

評 論
Ⅷ

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

本文印刷 株式会社精興社

口絵印刷 松本精喜堂印刷株式会社

付録印刷 株式会社精興社

口絵製版 株式会社学術写真製版所

製本 大口製本印刷株式会社

製函 日本紙バルブ商事株式会社

本文用紙 特漉上質紙・三菱製紙株式会社

皮革 靱井皮革株式会社

表紙用紙 手漉局紙キラ引・株式会社山田商会

扉用紙 ゴールデンアロー・特種製紙株式会社

見返用紙 しぶ茶堅紙・特種製紙株式会社

函用紙 Sベラン絹目・特種製紙株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします

三島由紀夫全集 第三十二卷 目次

あとがき〔三島由紀夫短篇全集〕1

6) 九

若さと體力の勝利——原田・ジョフレ

戦 三

床の間には富士山を——私がいまおそ

れてゐるもの 二四

「壯年」完成の喜び——林房雄氏の「文

明開化」 二七

跋〔高橋陸郎著「眠りと犯しと落下と」〕

..... 三〇

「熊野」について

..... 三三

私の信條

..... 三五

義父の若さ

..... 三六

「潮騒」執筆のころ

..... 三九

谷崎潤一郎氏を悼む

..... 四三

谷崎文學の世界

..... 四七

あとがき〔三熊野詣〕

..... 四九

私の戦争と戦後體驗——二十年目の八

..... 五八

月十五日 五

谷崎朝時代の終焉 三

あとがき〔目——ある藝術斷想〕 五

異國趣味について 六

太陽と鐵 三

跋〔サド侯爵夫人〕 一四

「サド侯爵夫人」について 一三

期待はづれの一戦〔原田・ラドキン戦〕 一四

無題〔同人雜誌賞選評〕 一四

日記 一五

日本人の誇り 一四

手で觸れるニューヨーク 一五

解説〔日本の文學2 森鷗外(一)〕 一三

危険な藝術家 一六

をはりの美學 一八

世界前衛映畫祭を見て——傑作・コク

トオの「詩人の血」 一七

「われら」からの遁走——私の文學……………	二七〇	「リュイ・プラス」の上演について……………	三六九
花柳章太郎丈回顧……………	二六一	私の遺書……………	三七一
お茶漬ナシヨナリズム……………	二八三	ナルシシズム論……………	三七五
法律と餅焼き……………	二九五	私のきらひな人……………	三九一
わが育兒論……………	二九八	ビートルズ見物記……………	三九七
「憂國」の謎……………	三〇二	「サド侯爵夫人」の再演……………	四〇二
製作意圖及び經過（「憂國 映畫版」）……………	三〇五	中河與一全集を祝ふ……………	四〇四
私の愛することは……………	三〇四	堂本正樹氏のこと……………	四〇六
「憂國」……………	三〇五	不運な二作——芥川賞選評……………	四〇八
映畫的肉體論——その部分及び全體……………	三〇七	テネシー・ウヰリアムズのこと……………	四一〇
自畫像の記……………	三〇五	團藏・藝道・再軍備……………	四一六
鵬雲齋におくることば……………	三〇七	あとがき（「聖セバスチアンの殉教」）……………	四二五
人生の究極の夢を……………——作者兼演出	三〇九	谷崎潤一郎、藝術と生活……………	四三六
家兼俳優のことば……………	三〇九	三つの好條件（「現代日本の小説」参加 の辯）……………	四三八
闘牛士の美……………	三一五	勇氣あることば……………	四四〇
觀戰記（原田・ジョフレ戰）……………	三一五	本造りのたのしみ——「聖セバスチア	
二・二六事件と私……………	三二五		

「鏡子の家」——わたしの好きなわたし	四二	の小説	四六
日本への信條	四六	原田・メデル戦	四八
年頭の迷ひ	四七	日 録	五〇
無題(同人雜誌賞選評)	四七	中山仁君について	五七
序(船坂弘著「英靈の絶叫」)	四八	「贗の偶像」について	五九
日記	四七	青年像	五二
プレイバシー裁判の和解前後——週間	四四	「アラビアン・ナイト」	五〇
戯曲「アラビアン・ナイト」について	四四	本當の青年の聲を(日本學生同盟發足 によせて)	五二
序(矢頭保寫真集「體道・日本のボディ ビルダーたち」)	四〇	忘却と美化	五三
「宴のあと」事件の終末	四六	「道義的革命」の論理——磯部一等主計 の遺稿について	五五
伊東靜雄の詩——わが詩歌	四二	男性的な文章——芥川賞選評	五九
遠藤氏の最高傑作——谷崎賞選後評	四〇	あなたの樂園、あなたの銀の匙——森 茉莉様	六一
N・L・Tの未來圖	四六	南北的世界(「櫻姬東文章」)	五六
鳳凰臺上鳳凰遊ぶ	四六	古今集と新古今集	五〇
谷崎潤一郎について	四三		
「の殉教」の翻譯	四三		

無題(安部公房「友達」について)	五三
久保田万太郎全集を推す	五五
誘惑——音楽のとびら	五六

解題	五一
校訂	五三

三島由紀夫全集 第三十二卷 評論 (8)

あとがき〔三島由紀夫短篇全集〕 1と6)

1

今、作者自身がこれらを讀み返すと、少年時代に人に出した戀文が、手もとに歸つてきたのを讀み返すやうな、何ともいへない氣恥かしさに襲はれる。もちろん戀文だから、一生けんめい、全身全靈をあげて書いてある。そればかりではない。その年齢相應のずるさも備はつてゐて、あまり情熱的に見られぬやうに用心して書いてゐるところもある。純情といへば純情だが、その純情と、無力感と、悲しむべき偏執と、夢と、あやまてる自意識と、それらのものが、すべて一緒になつてゐる。そしてそれなりに美しいことは、すでに中年になつた作者自身には、安心して認めることができる。

それにしてもこれらは、どういふ人に對して書かれた戀文だらうか？ 美に對してだらうか？ 自分の纖細な詩的感受性を永遠に甘やかしてくれる、お人よしの美神に對してだらうか？ 今になつてみると、その戀文の相手は、私にはかなり正體がはつきり見えてきてゐる。それは言葉である。「言葉」に對しての熱烈な戀文の數々がこれだ。

これらの作品は、私の十五歳から二十一歳までの間に書かれた。そのうちで「彩繪硝子」はも

つとも古く、「輕王子と衣通姫」はもつとも新らしい。そして、この中で戦後に書かれたのは、「岬にての物語」の後半と、「輕王子と衣通姫」だけであつて、「岬にて」は殊に敗戦の日をはさんで書きつがれた。又、「中世」は、いつ来るかわからぬ赤紙（召集令狀）にそなへて、遺書のつもりで書いた作品である。

本當に私は、これだけの作品を残して戦死してゐれば、どんなに樂だつたかしのれない。運命はさういふ風に私を導かなかつたが、もしそのとき死んでゐれば、多くの讀者は得られなくても、二十歳で死んだ小浪曼派の夢のやうな作品集として、人々に愛されて、細々と生き長らへたかもしれない。今や、私の未來には意地悪爺さんへの一路あるのみ。

このうち、恩師清水文雄先生の同人雜誌「文藝文化」に載つた「花ざかりの森」「みのもの月」は、もつとも國文學風、王朝風であるが「中世」や「輕王子」のやうに日本の過去を扱つても、私の場合は、いつも半ばハイカラで、十九世紀末のヨーロッパの類唐派の雰圍氣を模してゐた。純然たる現代小説は、むしろ「彩繪硝子」から「煙草」への線上にある。

戦後のもつとも權威ある文藝雜誌の一つ「人間」に、川端康成氏の推薦で「煙草」が載つたのは、昭和二十一年（一九四六）六月であり、おなじく講談社から花々しく發刊された新らしい文藝雜誌「群像」に、「岬にての物語」が載つたのは、同年十一月であつたが、どちらも何の反響もなかつた。

2

この集に收めたのは、戦後の實驗期の作品群で、短篇小説といふ形式を利用して、さまざま

エスキースを試みたものだが、作家は誰でも（特に月刊誌の短篇中心の日本文壇では）、初期にかういふ時期を持つてをり、後年の諸長篇にいたつてひろげられる主題の種子を、この時期に、自分ではほとんど無意識に、そこらぢゆうにばらまいておくわけだ。

たとへばこの中で、「夜の仕度」には「美德のよろめき」や「假面の告白」の、「家族合せ」や「殉教」には「假面の告白」の、「幸福……」や「毒薬……」には「美しい星」や「金閣寺」の、「大臣」には「宴のあと」や「絹と明察」の、それぞれの萌芽が見られる筈である。それはあるひは作者自身にしか見わけのつかぬ證據かもしれないが、作者が見れば、ちやんとナメクヰの歩いたあとみたいな銀いろの筋が、それら年月を隔てた兩作の間にはつきりと辿れるのである。

しかし、昔も今も、形式意慾ばかりいたづらに旺盛な私は、當時の短篇群も、ただのエスキースとしての自然な流露感を以て書いてはゐらず、小品なりといへども、いちいち頼縁に入れたつもりになつて書いてゐるから、習作らしい好ましさに缺けてゐると思はれる。

「夜の仕度」は、身邊に取材して、それをフランス風心理小説に假託するといふ手法においては、堀辰雄の「聖家族」の亞流であるけれど、私の作品には堀氏の作に比べて明らかに濁りがあり、その濁りがまた私の活力である。

「春子」は比較的素直な手法の小説で、「人間」特別號にたのまれて大ハリキリで書き、百枚書いて持つて行つたのを、名編集長木村徳三氏の斧鉞によつてスッキリした形に短縮されたといふ挿話は、他にも書いた。戦後文學全盛期への抵抗として、私はジイドの「プレテキスト」にある、「作家にもつとも重要な資質は官能性である」といふ一句を信奉してゐた。

考へてみれば、この集のほとんどは、いはゆる戦後派への抵抗として書かれたと云つてもよく、

「寶石賣買」や「頭文字」の貴族趣味もさうなら、「山羊の首」の、人間の實存の象徴としての山羊の首の出現を、わざと風俗畫的に軽くあしらつた手法もさうなら、「獅子」の狂的な自己肯定の主題もさうであつて、さういふ時代への抵抗の要素を取り去つてこれらの作品を讀んでみれば、かなりわかりにくいところが出てくるにちがひない。

しかし一面私も戦後文學の恩恵を蒙つてゐるのであつて、「幸福……」や「毒藥……」のやうな、私自身にとつてはかなり大切な哲學小説も、今日であつたら、とても目の目を見ることがなかつたにちがひない。今日のジャーナリズムは、こんな唐人の寢言みたいな小説をうけ入れる餘裕はないのである。

「寶石賣買」は私にとつてほとんど唯一の未完の小説であるが、この主題はいづれ將來、展開してみたいと思つてゐる。

ついでながら、エウリピデスの「メデア」にほとんど忠實に據つた「獅子」における、古典主義の小説作法は、その後たびたび私の愛用するところとなつた。「ダフニスとクロエ」に據つた「潮騒」がさうであり、謠曲に據つた「近代能樂集」がさうである。

3

本集に收めた短篇は、ほとんど、異常な心理状態で書かれたものである。これは云ふまでもなく大袈裟な言ひ方だが、役所をやめて「さあ小説一本の生活だ」といふ俗な張り切り方をしてゐた一方、青年期の不安と孤獨感がいよいよ甚だしくなつて、八方やぶれのやうな仕事ぶりであつたと思はれる。これらの作品を、私は讀者がそんなことに頓着なく、たのしく讀んで下さること

をのぞむけれど、作者の目からは、これらの作品に、不安と焦躁と、多少のやぶれかぶれと、寝不足や、無理な仕事ぶりが、今もありありと透かし見られる。そして今でも私が、何ら恥かしげなく讀めるのは、「遠乗會」一篇だけのやうに思はれる。

「魔群の通過」はスタイルが俗で、いそいで無理押しに書いた作品の缺點があらはに出てゐるが、これも私は、當時、戦後文學のパロディーを書かうといふ意圖と、あはせて、囁目の没落階級のもろもろのエピソードの集成といふ意圖を以て書いたもので、ポオル・モオランの「夜ひらく」「夜とさす」の遠い灯あかりを浴びてゐる。いはゆる戦後思想は戯畫化されて、故意に輕薄に登場人物の口から語られ、それが時代を経た今日では、單なる輕薄さそのものになつて見えるのが残念である。しかし一方、當時、高見順氏から、冒頭の女の紫の袂が磨硝子に映る部分を褒められたのを、妙にうれしく記憶してゐる。

「訃音」は役人時代の經驗をもとに作つた全くのフィクションだが、そのモデルと目されるものの上役に、それから一年ほどして、満員の地下鐵の中で會ひ、逃げるに逃げられず、進退に窮したことがある。思へばそのころから私には、ブライヴァシー裁判の被告の座に坐る運命が豫定されてゐたやうである。

「親切な機械」は、白井吉見氏のいはゆる私の「社會ダネ」の小説の最初のもので、當時有名だつた女子大生殺しを扱つたのだが、取材のため京都へは行つたけれども、作中人物の京都辯などはろくに調べもしないで書かれてをり、若い私の無鐵砲には、今思ふとヒヤヒヤする。末尾の數行のシニシズムは、粹なつもりでくつつけたものだが、今讀めば、なくもがなの感が強い。かういふところは明らかにメリメの悪影響である。

「孝經」「怪物」「偉大な姉妹」は、いづれも親戚縁者からヒントを得たもので、祖母の家系にはこれに類似の人物が多かつた。

「火山の休暇」は、今讀んで、もつともなつかしい作品だが、私はそのころよく大島へ一人で旅をして、ホテルで自殺志望者とまちがへられたその體驗を經に、當時もつとも心をののかせた美しい風景からの詩的體驗を緯にして書かれた、わがままな詩的散文である。私はそのころ、海綿のやうに、海や美しい壯大な風景に身を浸されることを好んだ。そして自分でその毒をよく承知してゐたから、一方では造型への嗜慾に燃えた。美しい風景が私にとつて官能的に感じられる、その一等正直なところが、この作品には描かれてゐるやうに思ふ。作中、むりにそれを理論づけようとして失敗してゐるさまざまな屁理窟は、作品にとつてまづたく重要でない。

「花山院」も不用意な、雑な短篇だが、少年時代から「大鏡」の花山院退位の件を愛誦してゐたことの、その追憶の記念の意味でここに残した。あれは「大鏡」の中で一等美しい挿話だと思はれる。

「遠乗會」「日曜日」を書くころになつて、やつと私は、いくらか澄んだ、平靜な、客觀的な氣持で、小説を書くことができるやうになつた氣がする。それは特に「遠乗會」の、抽象的な、それでゐて靜かな皮肉とエレガンスを狙つた文體によくあらはれてゐる。

4

「習はうより馴れろ」といふ諺どほり、昭和二十六年（二十六歳）から二十九年（二十九歳）に及ぶこの巻では、私には、大分、短篇小説といふものの骨法が呑み込めかけてゐる。つまりカル